

「三谷家住宅」調査報告書

足立正智

1. はじめに

松江市幸町に所在する三谷家住宅は、松江藩家老三谷権大夫の下屋敷であった建物である。現在ある三谷家は家人の伝によると、元は三谷家老家下屋敷であり茅葺の農家風の建物であった。時期は不明だが、殿町にあった上屋敷の一部と御成門を移築し、新たな屋敷として残したことである。本稿は、現存建物の間取りを図面化し、現存する古絵図などと照合しながら、どの部分が移設されたのかを確認し、また移設された部分が上屋敷のものであったのかを検証するものである。

2. 移築の歴史をたどる

(1) 三谷家の歴史と屋敷

三谷権大夫は藩主松平直政と共に松江に入り、家老として重用された。以来、明治2年（1869）、8代権大夫長順まで松江藩の家老を務めていた家柄である。家格は5代目から3600石であった。上屋敷は殿町の南端にあたり、現在は「カラコロ美術館」などが建つあたりであり、松江城からは南南東の方角に当たる。旧日本銀行松江支店ビル（現カラコロ工房）が建つ場所は藩政時代には勢溜まりであったが、上屋敷の西側の一部はそこに面していた。

現在、三谷家には棟札が保管されており、それには6代権大夫長熙の代、天保5年（1834）に上棟されたと記載されている。『松江藩列士録』によれば三谷家の屋敷は6代目権大夫の時代、天保4年（1833）12月に焼失し、そして藩主の援助を受けて再建したことが分かる。この棟札には長熙公を筆頭に85人の人名が記されており、その中には多くの役人名もあることから、藩の作事方が関わった工事であったことが伺われる。これだけ大掛かりな工事であることからも、天保5年上棟されたと記されたこの棟札は、上屋敷の棟札であると考えられる（註1）。

(2) 絵図等

三谷家には屋敷の絵図がかなり多く残っている。上屋敷は文政9年（1826）のものと、他にはつきりと年代の分からぬるものがあるが、天保頃と明治初年頃のものと思われる。また下屋敷についても三谷家に数枚の絵図が残されている。これらはまだ年代の特定が出来ていないが、ほぼ同じ頃と思われる絵図があり、それぞれの間取りが異なっている。一つの推測として、絵図のいくつかは建築前の構想図であって、実際に採用されたものはそのうちの一つであるという考えが成り立つだろう。実際、

下屋敷の絵図面はそのどれもが間取りに多くの共通点を持っているが、今回調査した間取りと比較すると、その中でも1枚[絵図-1]の絵図と酷似しており、その他は細部に違いがある。もう一つの考え方としては、過去の建て替えまたは改修のそれぞれの絵図という可能性もある。もう少し検証が必要である。

ただ、現在の建物とほぼ同じ絵図をもって下屋敷の建築時のものとし、家伝通り上屋敷から一部分を移築して下屋敷を建て替えたとすると、上屋敷の最終の姿を写した絵図も特定できそうだ。そう考えると[絵図-1]はそれに当たると思われる。

(3) 現況の間取りと下屋敷絵図

今回実測した間取り図を[図-1]に示す。まず配置を見ると、主屋、塀、御成門、2階附き納屋、そして土蔵の位置と大きさが全くと言っていいほど[絵図-1]と一致する。主屋の間取りを見ても玄関と台所、玄関からまっすぐに延びる廊下とその両脇の部屋、そして突き当りの10畳半の部屋とその奥の茶室、水屋が見事に一致する。左手にある湯殿とその奥の6畳、さらに奥の6畳、3畳、2畳の部屋が[絵図-1]にはあるが、現況は欠落していることなどが相違となっている。しかしそれらは後に取り除かれたと見れば無理はない。現況の屋敷は、下屋敷の[絵図-1]が作成された時点の状況が元になっていることは間違いないだろう。外部の方から見ても裏付けできる(写真-1)。明らかに削り取られたような壁面と屋根の構成が、後年に余分な部屋を解体して取り去ってしまったことを伺わせてくれる。

(4) 移築された上屋敷の部分

さて現在の建物の元となった下屋敷の絵図が特定できたとなると、次は上屋敷のどの部分が下屋敷の一部に移築されているかだ。もちろん上屋敷は非常に大きいので、ほんの部分だけを移築することしか出来なかつたであろう。そして部分的な移築であれば、大きな屋根のかかった身舎の一部ではなく、比較的独立したような出っ張った部分が最も移築しやすい。となると[絵図-2]のどの部分であろうか。間取りが相似してなおかつ独立した部分となるとまず現況の建物の右手にある7畳半と10畳の続き間がやはり上屋敷の右上の方にある2部屋とよく間取りが似ている。絵図では「御廣座」と御次10畳となっている。さらに[図面-1]の右上の位置にある10畳半と茶室はやはり[絵図-2]の右上に突き出た形で存在する8畳と5畳半の続き間とその先にある茶室が酷似する。他の絵図ではその部分が「檀那様・・とも書かれている。

このようによく似た間取りで、しかも主屋から突き出て半分独立したような部分を移築したと見るのは自然でもあるのだが、幾分問題は残る。まったく同じではないのだ。現在の建物の10畳部分は1間半の床を持ちその脇が書院となっている。それに御廣座の左上隅が下屋敷では広くなっている。また檀那様・・の部屋も次の間と一緒に考えると現在は幾分狭くなっている。床を加えたり間取りを変えたりすれば、柄穴や壁があった部分が痕跡として残るのが普通だ。現在の建物にはそのような痕跡が全く見られない。表面的に隠せない部材を取り換えたのか、あるいはよほどうまく使い回しているのか。もう少し床下や天井裏の部分を調査してから判断しなければならない。

(5) 移築について

上記のような疑問が残るため、移築については断定的なことはまだ言えない。しかし、間取りはかなり酷似している部分がほとんどである。同じ場所に建てなおす場合、必要な部分を除いてほぼ建て直し前と同じに作ることが多いのが近世の建物である。だが違う場所に、用向きも違って建てる場合に同じ部分があれば、むしろ部分的に移築し、必要な部分を増築したり減築したりして改良を加えたと考えるのが自然であろうと思う。もう少し詳しく調査する必要があるが、三谷家下屋敷であった現在の三谷家住宅は、部分的に上屋敷の一部を移築して、新たに建てたものであると考えていいだろう。

(6) 全国的にも貴重な家老屋敷の遺構

三谷家上屋敷最後の絵図は明治2年(1869)のものと言われている。これが確実であれば、明治2年までは上屋敷が存在していたということになる。明治5年(1872)ごろになると藩主や重職にあった多くの旧家臣は東京などに移住していく。朝日家老家などもその頃に細分化され、一部が売り払われ移築されている。土地台帳を見ても明治のその頃になると敷地が細分化されていっているのが分かる。大きな旧藩士の屋敷も分割され、整理されていったもので、家老屋敷なども解体されたり分割されたりしていった。三谷家の上屋敷も多分その明治2年から5年ごろにかけて、下屋敷であった幸町などに移築されていったものと思われる。[絵図-1]がいつごろ描かれたものであるかは絵図に記載が無いのではっきりしない。明治の初めに上屋敷の一部が移築されたとなると、絵図はそれ以降のものと言うことになる。そのことに矛盾はないのか。移築した門を御成門と明治になつても称したのか。しかし、「2階附納屋」とはいかにも明治の表記らしくもある。また部屋名の表記が斜めに書かれているのは江戸期の絵図にはあまり見られない。部屋名の「疊」という文字表記も明治以降の家相図に多くみられる。そして家相を判定するための方位尺が明治期の他の家相図に用いられているものと一致する。これらのことから[絵図-1]は明治になってからの家相図であると思われる。

幾つか疑問も残るのだが、ほぼ間違いないのは現在の三谷家建物が、部分的にも近世後期の家老屋敷の一部であったであろうことだ。数寄屋風の造作、茶室の作り方などは殿さまの御成りのためにつくられたものでもあろう。これらは江戸時代を写す貴重な建物であることは間違いない。今後、絵図や文書、そして現存の建物を調査し、さらに確実な調査結果が得られるよう努力することによって、松江のみならず、全国的にもまれな家老屋敷の状況が幾分なりとも分かっていくことになるだろう。

3. 三谷家住宅の特徴

三谷家住宅の現在の間取りについては、先の項で残された絵図などで検討したが、それによって明治初期のころと思われる姿が予想できるので、それと照らしてみる。まず配置であるが、主屋と土蔵、納屋の大きさと位置、そして塀と御成門についてもほぼ絵図と変わりはない。[図面-1]は現況の実測図であるが、[絵図-1]と比較してまず台所の形が違う。そして台所より奥の座敷が一部取り去られている。その座敷があった部分に斜めに張りだした廁が現在はあるが、撤去の後付け足したものであろう。さらに玄関から入って式台を上がり廊下の右手に廁などが張りだしているが、その形が幾分違う。また仏間の位置が違うのは奥の6畳の座敷を撤去したためであろう。さらに水屋の左隣も絵図

では廁となっているが、現在は撤去されて裏への出入口となっている。これらを除けば、ほぼ絵図と変わらない。

玄関を上がると畳敷きの廊下が奥に続く。廊下は畠1畠分の幅があつてかなり広い。奥に向かって廊下の右手に客間となる座敷があるが、造作は面皮付きの柱を使い、縁は博縁であつて、いわゆる数寄屋普請となっている。上屋敷から移築された部分であるとすれば、上屋敷においても茶事を前提とした座敷ではなかつたろうか。廊下の左手の最初は台所で、土間の部分も残っているが当初とはかなり改造されている。湯殿も位置が変わっている。そこから奥に、使用人の台所や住居部分があったものと思われるが、簡素化されている。その奥に仏間があるが、元々の位置と少し変わっているようだ。廊下の奥に家人の居室であった座敷があり、それに隣接して茶室「万雲亭」がある。居室としていた座敷は行の相でつくられ、床の間や斜めに切られた床脇は装飾的であり、面皮の柱なども使われているが表の座敷ほど数寄屋風ではない。万雲亭は2畠台目中板付のもので床に太い丸柱が配されている。柱は船付の丸太で、虫食いの穴があいた粋なものである。その脇に水屋を持つ。

台所から奥の座敷が撤去されていることはすでに記したが、外観を見ても、その部分がすっぱりと切り取られたような屋根の形をしており、そこからも裏付けられる。先に絵図を比較して上屋敷の一部ではないかともくろんだ部分についても、屋根の形はそこだけが流れが違ひ、他の部分と分離したようになっていることからも、移築の可能性は高いと思われる。台所の部分については、外側に井戸があったのが現在では確認できない。しかし井戸があったであろう部分は、植物が繁茂しているので、井戸があったという可能性は否定できない。

4. おわりに

現存する幸町の三谷家住宅は、三谷家老の下屋敷であり、おそらく明治5年(1872)ごろに、解体される上屋敷の一部を移築して、既存の建物と合体されたものであろうことが予測できる。最も既存に近い姿の絵図面は、家相を判定するものであり、明治期の家相図によく用いられる方位や室名などの文字であることから明治時代につくられたものであると思われる。江戸時代の武家の家老屋敷が一部なりとも残っている例は稀であり、その価値は高いと思われる。今後は構造的に移築部分や裏付けとなる資料を精査し、年代や移築の部分を確定して行くことが必要となるであろう。

註1 和田嘉宥「三谷家住宅について」『日本建築学会中国支部研究報告集』第23集、2000年

(謝辞) 本稿を執筆するにあたって、三谷家当主 三谷健司氏には多大なるご便宜をいただきました。記して感謝申し上げます。

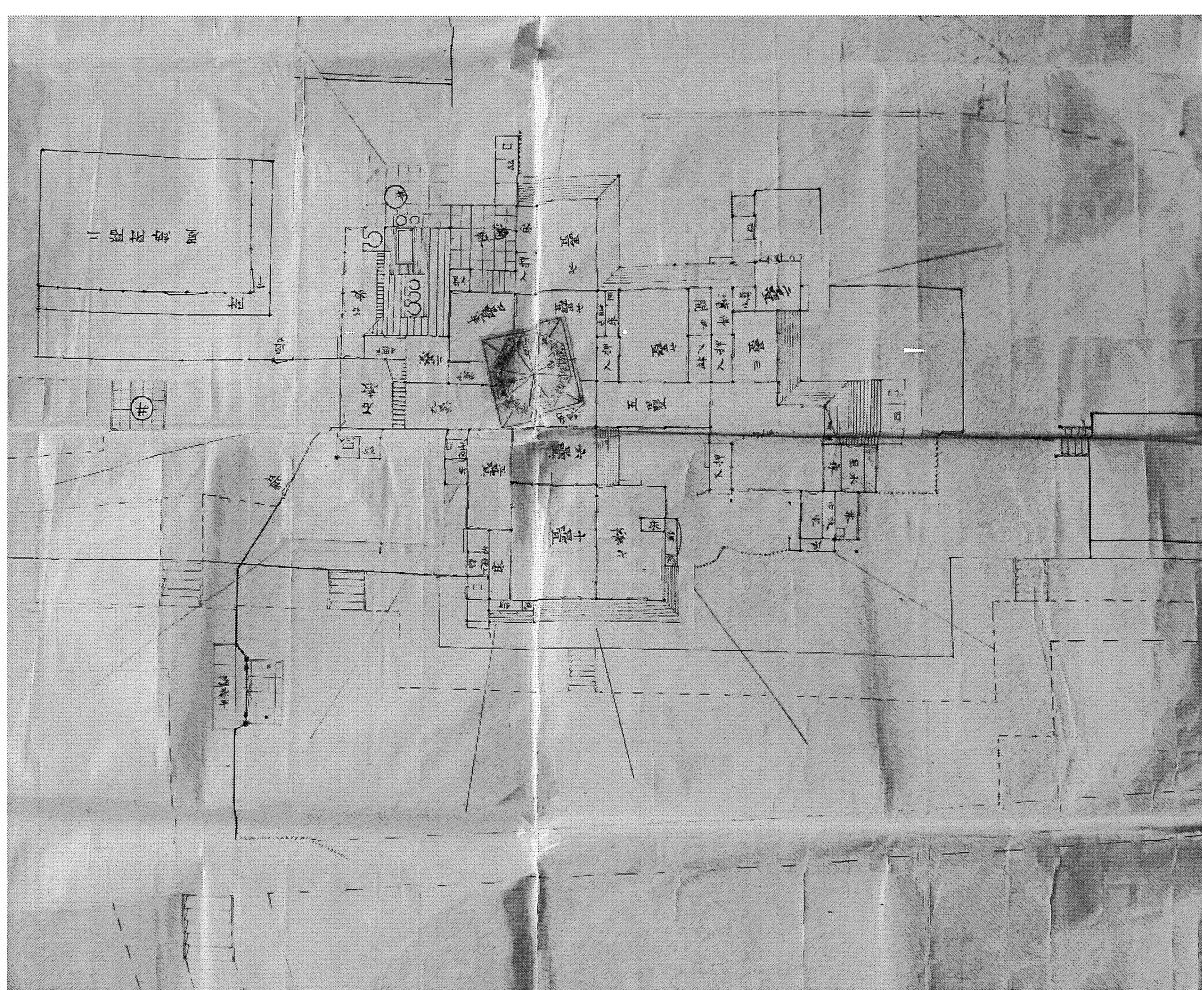
(あだち・まさのり 松江市文化財保護審議員)



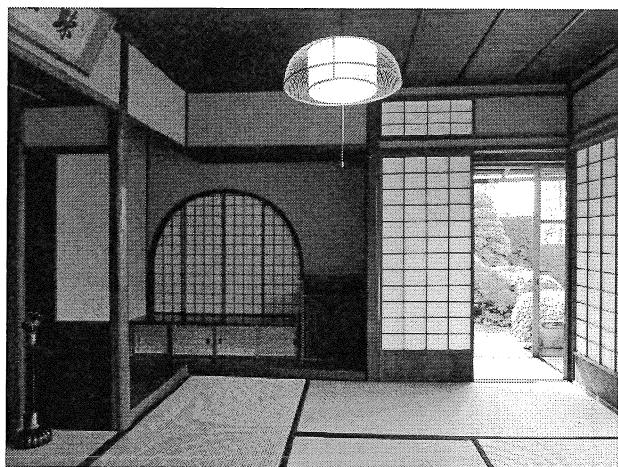
写真 1
切り取られた断面部分



移築部分の座敷



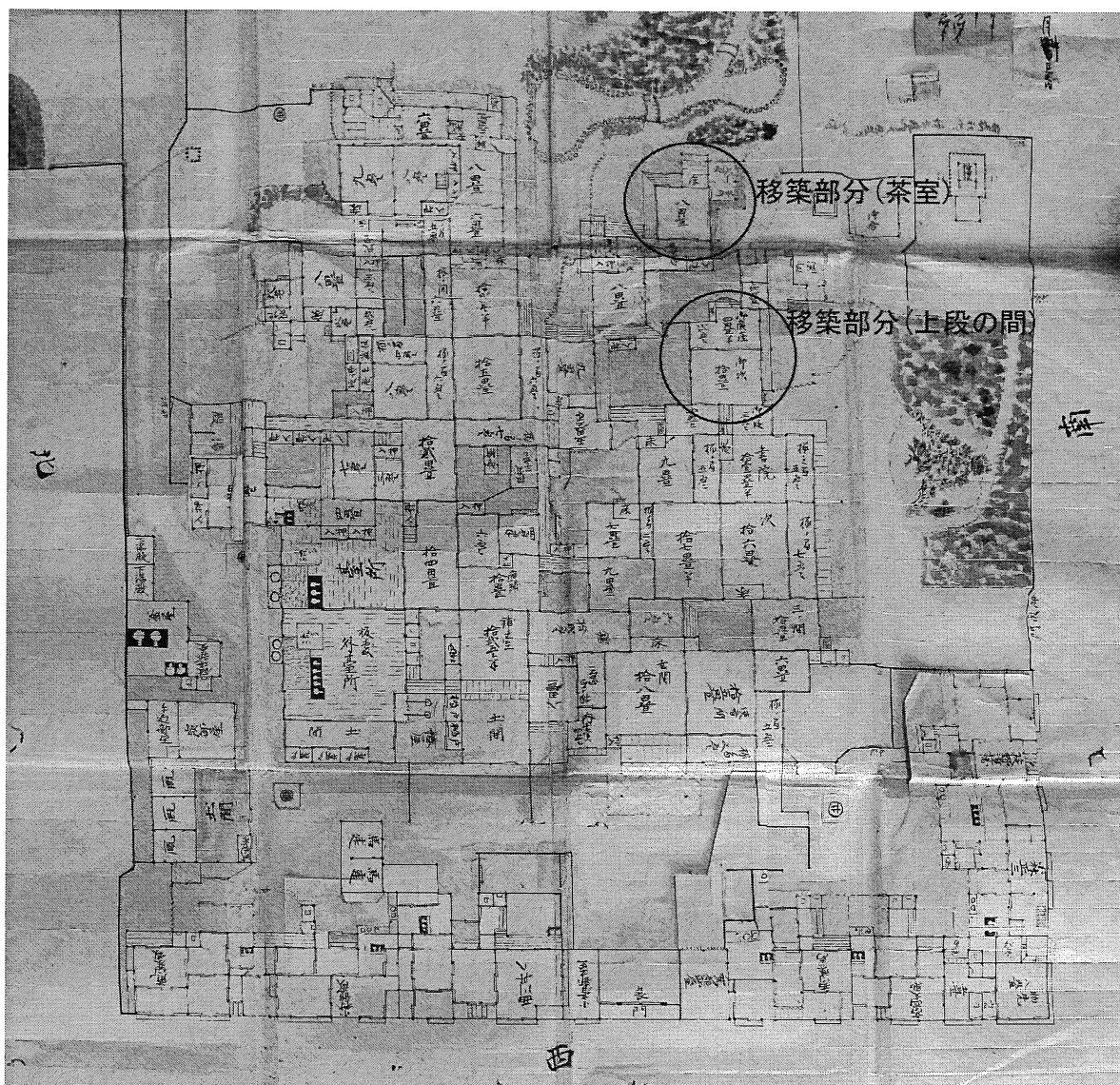
絵図 1



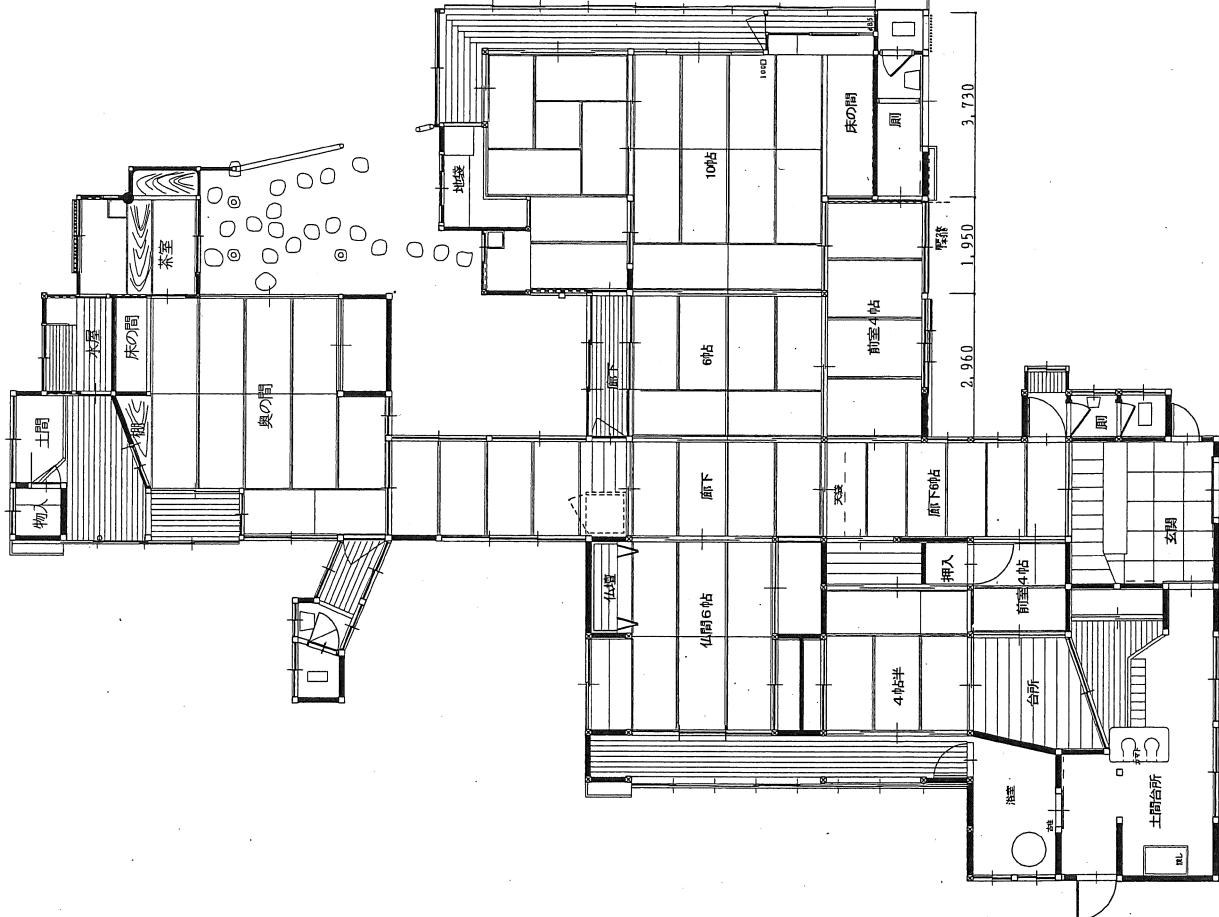
移築部分上の間の床



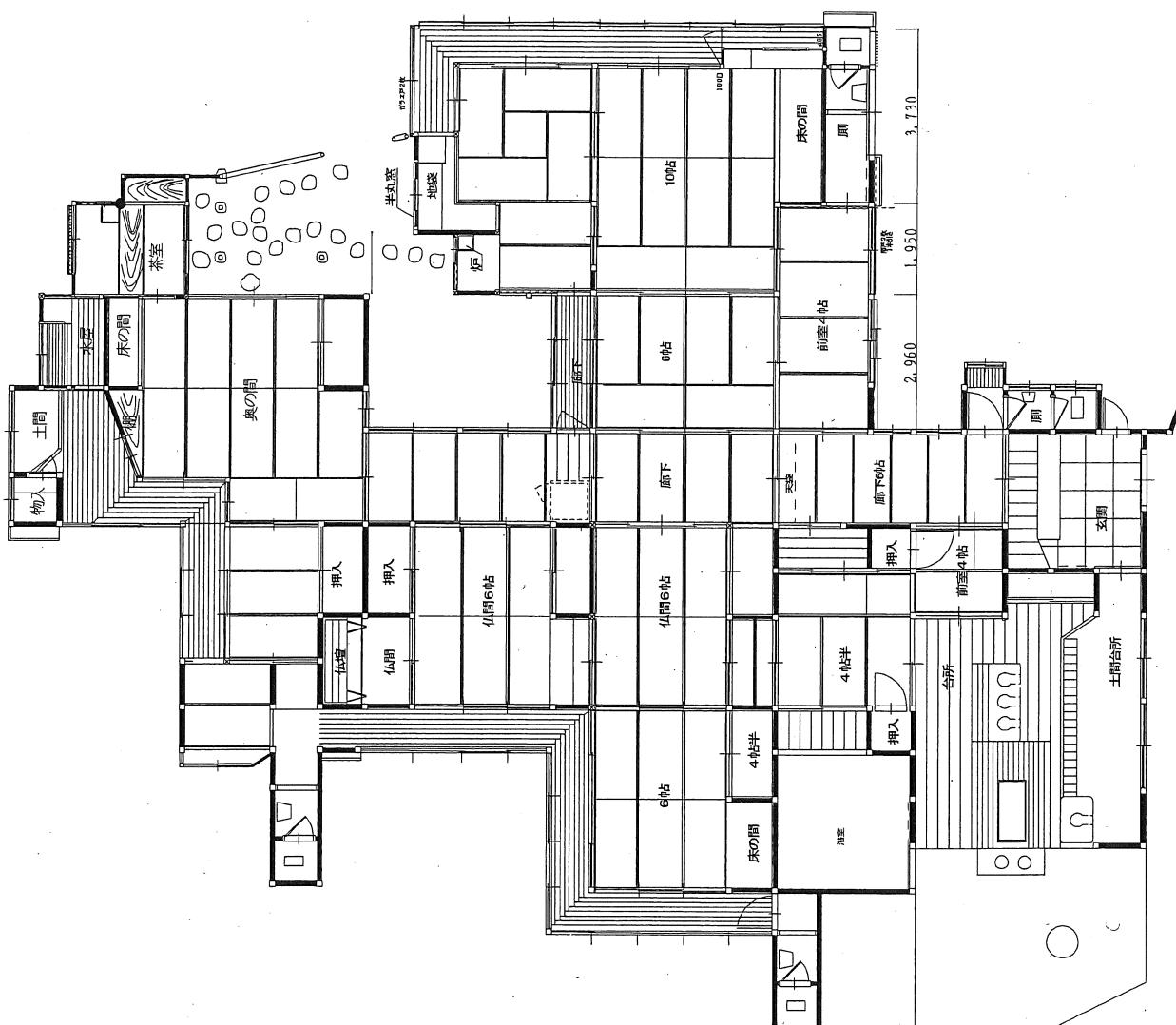
万雲亭



絵図2



三谷家（松江市幸町） 現況平面図



三谷家（松江市幸町） 下屋敷絵図復元図

- 123(38) -

松江歴史館

研究紀要

第3号

◆松江藩研究◆

城下町松江研究の現状と課題	西島 太郎	1
松平斉貴の上洛道中記録に見る旅の姿	小山 祥子	27
——「御上京一途」を参考として——		
松江藩儒黒澤石斎の研究（一）	西島 太郎	37
二人の甫庵 ——小瀬甫庵と山岡甫庵——	福井 将介	50
堀櫻山・市郎父子に関する新知見	西島 太郎	73
——展覧会開催後の調査より——		
資料紹介 安達家文書目録・翻刻（一）	新庄 正典	101
「三谷家住宅」調査報告書	足立 正智	130(31)
高野山奥の院に所在する堀尾家墓所について	西尾 克己	160(1)
——近世大名墓と堀尾家の宗教的背景——		
	稻田 信	
	木下 誠	

◆博物館研究◆

松江歴史館整備事業で生じた問題とその整理 平成24年企画展	大塚 享義	122(39)
「松江藩士の息子画家になる。孫写真家になる。」展の記録と分析	西島 太郎	109

平成25年3月



MATSUE HISTORY MUSEUM

BULLETIN

No. 3 MARCH, 2013

CONTENTS

◆STUDY OF MATSUE CLAN IN THE EDO PERIOD◆

Current Status and Issues of research MATSUE castle town-----	NISHIJIMA Taro	1
The figure of the trip seen to record the going-up-to-Kyoto trip of the Matsudaira Naritake—Refer to a "Gojyoukyouitto" -----	KOYAMA Sachiko	27
Study of SEKISAI KUROSAWA is a Confucian scholar of MATSUE clan vol.1 -----	NISHIJIMA Taro	37
A research for "two persons ' Hoan (小瀬甫庵 and 山岡甫庵)" ---	FUKUI Masayuki	50
New knowledge about the father and son REKIZAN and ICHIRO HORI-----	NISHIJIMA Taro	73
Document introduction : A list and reprint of the document of ADACHI (安達家) vol.1 -----	SINSYO Masanori	101
Investigative report of MITANI house-----	ADACHI Masanori	130 (31)
Religious background of early modern times ----- daimyo graves and the Horios	NISHIO Katsumi	160 (1)
	INATA Makoto	
	KINOSITA Makoto	

◆MUSEUM STUDIES◆

Problems and solutions associated with the construction of Matsue History Museum -----	OTSUKA Takayoshi	122 (39)
Recording and analysis of the exhibition. "Become a photographer grandson. Son to become a painter of Matsue samurai" on exhibition -----	NISHIJIMA Taro	109

Published by

Matsue History Museum

Matsue, Japan

平成二十五年（二〇一三）三月二十九日発行

松江歴史館研究紀要 第三号

編集・発行 松江歴史館

住 所 島根県松江市殿町二七九番地

F 電 話 ○八五二一五五一六〇七
A X 話 ○八五二一三三一一六一一

